

## 自信が持てる

心が強く自信が持てているときに、人はより安心度を培いやすい。自分自身に確信を持ったり、自信を持ったり、自分自身の存在価値を感じたりすることで、人は不安やストレスから解放されやすい。何かに誇りを感じたり、文字通り自分自身の中に“大きさ”を感じたりする状態が心の強い状態と換言できる。このような自己肯定イメージは、くじけない気持ちを育てる基礎となる。子ども達は、誰かにこの思いを踏みつけさせようとはしないし、懸命に自己主張をして意を通そうとする。

## 自分自身であろうとする・自己と向き合う

子どもが感情を抑圧しようとせず感情を顕わにするのは、楽しいからだけではなく、困難な経験から立ち直ろうとするからでもある。

### 安心度

- ▶ 安心度の高い子ども達は、心地よい状態にあり、日々の生活を精一杯楽しんでいる。
- ▶ 彼らは一緒に周りのものにかかわりながら楽しんでいる。
- ▶ 彼らは生き生きと、またリラックスした落ち着いた状態にいる。
- ▶ 彼らは心が開かれた感性の高い状態で、周りの環境を受け入れてかかわっている。
- ▶ 彼らはのびのびと自主性を持って、らしさを失わずにいる。
- ▶ 安心度は、自分自身に対する自信、自分を大切にすること、そしてくじけない強い心とつながっている。
- ▶ これらは全て自分自身、自分の感情や経験に素直に純粋に向き合うことから成り立っていると言える。

### ■ 安心度はなぜ重要なのか

安心度は、人がいい精神状態にいるか、また、人として心地よさを感じながら存在しているかどうかを示す指標である。子ども達の安心度が低いということは、人として必要な基本的な欲求が満たされていないということになる。

### 基本的欲求

1. 生理的欲求（食べる・飲む・動く・眠る・など）
2. 愛情・思いやり・優しさに対する欲求（抱きしめられる、スキンシップや傍らに居ること、愛情や思いやりを受け与える）
3. 安全で、明解で、安定した継続性に対する欲求（多少は予測のつく環境にあること、どこにいるのか環境がわかること、その環境下で何が許され、何が許されないのかが明らかかなこと、そして、他者を安心して頼って構わないこと）
4. 認められて肯定されることに対する欲求（他者から受け入れられ認められる気持ち、他者にとって意味ある存在であること、集団の一員であるという所属意識があること）

5. 自主・自律に対する欲求（自分自身で何かできるという気持ち、何かを習得した自信、自己の限界へ挑戦する経験、成功経験・達成感）
6. 自己の存在意義と道徳的価値観への欲求（“よき”人であるという気持ちと他者や周りの環境とつながっているという感覚）

無論、不快に感じる状態が全て問題視されるわけではない。欲求が満たされないことはよくあることである。だが、安心度の低い状態が長期間にわたって続くことは、子ども達の心の育ちに問題を引き起こすことがままある。例えば、自分自身や自分自信の感情を見失ってしまったり、極端に無関心、不安、攻撃的な態度を示したり、発達の遅れをきたしてしまうなどである。

人格の基礎は人生の初期の段階にかかっているため（他の指標には目がいても）、子ども達の安心度が低い状態であることを告げるシグナルにしっかりと気付いていないのである。少し大きめの子どもにおいては、これらのシグナルは子ども達の社会性や情緒性の発達が危機にさらされていることを示していると言える。

端的に言えば、安心度とは“生活の質”のことである。それはまた、子どもと彼らを取り巻く環境との最適な関係とも呼ぶことができる。

#### 実践化に向けて

子ども達の安心度を向上させると言うことは、子ども達を甘やかしたり、子ども達の欲しいものを全て分け与えるということではない。子ども達は、彼ら自身の生活が真に満足する状態になるように積極的な役割を果たそうとし、また、大人は、子ども達が自信を持てるように育て、感じたことを表現できるように援助し、子ども達同士でかかわり合わせ、成功する経験を培わせ、子ども達の才能や行動する力を助長することを役割とする。

安心度は、活力を喚起し、子ども達が子ども達自身であろうとすることを保証し、子ども達の内面を強くしていく。これが、子ども達（未来の大人達）に安心度をもたらそうとする理由である。

### **Involvement: 夢中度**

夢中になっている子どもは、まさに活動に“埋没している”状態である：ブロックで遊んでいたたり、粘土で何かを作っていたり、パズルを作っていたり、お話しを聞いていたり、他の子ども達とかかわっていたり、などである。夢中度とは、乳児及び大人の双方に見ることができる心の状態のことを意味する。

### **動機・きっかけ**

夢中であるということは、活動している内容に心を奪われていると言うことであり、心から興味を持ってそれに取り組んでいると言うことである。人に頼まれたり、強いられてすることからは、高い夢中度を得られることはない。思いは内側から突き動かされて出てくるものである。

### **強く心が動く活動**

夢中であるということは、完全に解放された状態で活動していると言うことである：そこで得られる感性（感じる心）は強烈である。身体感覚や動き、色、音、匂い、味といった五感を使う状態には、見えないがある幅や深みがあり、フルに空想力や心を動かして感じなければならない。夢中度が低い場合、その感覚は真に響くものとならず、表面的な感覚だけに留まってしまう。

### **満足度**

夢中になるということは素晴らしい状態である：まさに自分自身がどこかに持って行かれる感覚と言える。そこで経験することは身体を駆け抜けていく活力そのもので、子ども達は、自らがその状態に入ろうと主体的に活動に取り組んでいく。遊びとは、まさにこの満足感が得られる最高の場所であると言える。夢中度に欠けていれば、退屈で虚無感やフラストレーションを感じてしまう。

### **探求心**

夢中度の源は、発見や探究したいという衝動にあり、自分自身の周りの世界を経験し、感覚を駆使し、現実を“つかみとりたい”という衝動にある。元来、この“しっかりとつかむ”という意味は文字通り解釈されるべきである：自分自身の手の届く範囲内のもの全てに触れ、しっかりとつかみとる。徐々に、“つかみとる”ことは“理解する”ことを意味するようになり、その具体性が徐々に失われていく。

### **自己の限界に挑戦する**

何かに夢中になると言う状態は、その活動が刺激的で、簡単すぎず、難しすぎないものである時においてのみ起こりえる。夢中度の高い子ども達は、自分自身の限界ギリギリのところまで活動を行っている。大人子ども、発達の遅い早いに拘わらず、持てる技術を駆使し、全身全霊で取り組んでいる。

### 夢中度

- ▶ 夢中度の高い子ども達は、集中力も高く、また、活動に没入している。彼らは、活動に興味を示し、やる気を喚起され、魅了される。それ故、最後までやり遂げようとする。
- ▶ 子ども達が何かを真似ることは、強く心が動く活動であると言える。彼らは、感覚や意味をフルに経験している。
- ▶ 探求心に満ちあふれることで、子ども達はしっかりと満足感を得ることができる。
- ▶ 活動に夢中になっている子ども達は、自分たちの限界ギリギリのところまで活動を行っている。
- ▶ このような質を携えているということから、夢中になるということは深い学びをもたらす状態であると言える。

### ■ 夢中度はなぜ大切なのか

夢中になるということは特別な状態を指す。子ども達が何かに夢中になっている姿には驚かされるだけでなく、直感的に遊びの邪魔をしないでおこうと感じるはずである。

子ども達が何かに夢中になっている時、その能力を駆使して“成長”を遂げようとしていることが窺い知れる：学びの段階は深まり、能力技能も高まっていく。夢中度に欠けていれば、注意してその理由を探りたい。発達が停滞している可能性もある。それ故、子ども達が夢中になれるような多様な活動を展開させる環境構成のためには努力を惜しまずにいたい。

日本版SICS幼児版の作成

分担研究者 芦田 宏 兵庫県立大学環境人間学部教授

本研究は、Leuven 大学（ベルギー）の Ferre Laevers 博士たちが開発し、実施している保育の質向上のためのツールである SICS（A Process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings）を参考に、日本の保育実態に合わせた日本版を作成し、園内研修での利用することを目的とするものである。研究チームによる議論、保育所長から意見収集、所長、主任クラスの方へのアンケート調査、試案の作成と実施を通して、オリジナルとは異なる点も多いが、日本版の作成を行い、研修用 DVD、実施方法の DVD の作製も行った。

A. 研究目的

Leuven 大学（ベルギー）の Ferre Laevers 博士たちが開発し、実施している保育の質向上のためのツールである SICS（A Process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings）を参考に、日本の保育実態に合わせた日本版を作成し、園内研修での利用することを目的とするものである。

B. 研究方法

1. Laevers 博士たちが開発した SICS に関して研究チームによる検討
2. 保育所長 5 名を招いて、概略を説明し、日本の保育現場での利用のための意見の聞き取り
3. 主任・所長を対象として SICS で用いられるチェックリストに関するアンケート調査
4. アンケート調査を元にしての研究チームによる項目確定作業
5. 実施方法の試案の作成
6. 「夢中度」評定 DVD 作製

7. 実施方法試案を用いての実際の園内研修と問題点の把握

8. 実施方法試案の改訂作業

9. 改訂試案に基づく園内研修の実施とビデオ撮影

C. 研究結果

1. Laevers 博士たちが開発した SICS を元に日本版 SICS の開発について研究チームで検討を行った。基本的な自己評価方法、特に子どもの観察とそれに基づく Well-being（安心度）Involvement（夢中度）の評定から始める方法については有効性があるであろうという結論に達した。

しかし、オリジナルの SICS は 3 段階 4 種類の用紙を用いて行うものであるが、その最初の Form A に関して、オリジナルは最大で 2 分で子どもを観察し、子どもの様子の記録と上記の評定を行い、クラスの半数近くの子どもの対象とするものである。この点については改善の必要が感じら

れた。日本においては、日常的に保育記録を取るなどの保育文化があり、短時間の観察よりも少し長い時間の子ども様子をエピソードとして取り上げた方が、子どもの内面的な部分を含めて、観察がより正確なものになるのではないかという理由からである。したがって、Form A の書式を新たに作成し直し、エピソードから始める自己評価法とすることにした。ただ、反対にエピソードを取る対象となる子どもの数は減らさざるをえなくなり、ランダムに選らんが子どもたち5-6名のエピソードを対象とすることになった。

2. 上記の基本姿勢の元に、兵庫県姫路市内の公立・私立の保育所（園）の所長（園長）5名の協力を得て、概要の説明を園内研修としての実施可能性について意見の聞き取りを行った。日常行っている園内研修とは異なり、Form A～D まである形式に乗っ取って行うためには、それ自体の研修も必要とし、直ちに取り組めるものではないが、基本的な考え方については理解を得ることができた。また、オリジナルの Form D が「改善点」のみを書くようになっていたが、保育をふり返る場合、改善すべき点だけではなく、現在優れているところも議論の対象にすることによって、優れているところをさらに良くしていく視点も得られるという指摘を受け、オリジナルにはない Form D の作成を行った。

3. オリジナルの Form C はチェックリストで「豊かな環境」「子どもの主体性」「支援の方法」「クラスの雰囲気」「園・クラスの運営」によって構成され、総数 57 の質問項目で作成されている。それを翻訳した後、日本におけるチェックリストとして有用かどうか、また日本語の表現が適切であるかどうかを問うアンケートを関東、関西、九州地区、36 名の主任、所長（園長）に対して行った。

4. 上記の結果、項目に関しては不要であるという意見が見られたものもあったが、多くは項目として妥当であろうという意見が多かった。しかし、妥当でないという意見のもの、日本語表現についてのコメント等多数の意見が寄せられた。そこで、それに基づいて研究チームで議論を行い、各項目の日本語訳を確定した（資料 1 参照）。保育環境や文化の違いがあるために、オリジナルとは意味の異なる表現になっているものもあるが、日本の現状に合わせた内容にしたと言える。

また、日本においては、現在大きな課題となっている「家庭との連携」がチェック項目にないことから、日本版には、これに関する項目を追加する事を決め、7 項目を追加した。

さらに、各項目を研修時間内に細かくチェックすることは時間的にも無理があるのではないかという事もあり、個々の項目のチェックではなく、カテゴリーごとのチェックに変更した。

5. 以上の過程において日本版 SICS で用いる Form A～D が完成したので、それを用いて、実施方法としてはできるだけオリジナルに近い形での実施方法の思案を作成した。そして、実際に行うために西南学院早緑子供の園に協力を依頼し、日本版 SICS の説明と、「夢中度」評定の理解に必要な子どもの様子の撮影を行い、「夢中度」評定用 DVD の素材 DVD を作製し、実施方法の試案に基づく研修会までに見て頂くことにした。

6. 実施マニュアルの説明後 3 週間後、西南学院早緑子供の園において、SICS 日本版の実施方法試案に基づいた園内研修を行って頂き、ビデオ記録を撮るとともに、終了後、実施してみたの率直な意見を聞いた。

結果として、まず「夢中度」評定用素材 DVD で夢中度の評定練習をして頂いていたが、その有効性が確認され、評定練習のための DVD 作製の意義が確認された。

しかし、一方で議論が進行していくにしたがって、対象となったクラスの実態にのみ焦点が狭まり、担当保育者の保育を評価するような流れになり、園の保育全体の質の向上への向かう議論の展開が難しいことが判明した。

また、議論の時間を短縮するために Form C のチェックリストはカテゴリーごとの評価にしたが、参加した保育者からは、個々の項目を時間をかけて丁寧にチェックし、自らの保育のふり返りに役立てたいという

積極的な発言もあった。

7. 西南学院早緑子供の園での試行をふまえ、研究チームで議論を行い、個別のクラスの保育に焦点化していくのではなく、個別のクラスからの見つけられた保育の質の向上のための視点を園全体へ広げていく方向での研修会になるように実施方法の改訂に関して議論を行った。

結果として、個別のエピソードに関しての議論は、現在の保育の良いところ、改善点への視点を得るには重要なものであり、じっくりと時間を取る必要があること、Form C のチェックリストは各自じっくりと取り組む時間を確保する必要があること、また対象となったクラスから出された視点を元に、保育者全員が自らの保育をふり返る必要があることが確認された。そして、このことを実際に行うためには、園内研修会の時間が長時間に及ぶため、2 回に分けて行うことが必要であることを確認し、実施方法の改訂を行った。

8. 改訂した実施方法に基づいて園内研修を行って頂くために「社会福祉法人 種の会 はっと保育園」(神戸市、灘区)に協力を依頼し、実施方法、Form 集を持参して説明を行った。そして、3 週間後に第 1 回目の園内研修会を、その 1 週間後に第 2 回目の園内研修会を行って頂いた。

それぞれの園内研修会の様子はビデオ撮影し、「日本版 SICS 子どもたちのエピソードから始める自己評

価値 実施方法」という DVD に編集し、本報告書に添付している。ご覧いただきたい。

実際に行ってみての保育者の方々の感想に次のようなものがあった。第 1 回目の Form B までの話し合いは、具体的なエピソードに基づいて行うために、話がより細かい方向へ向かい、実態把握や課題がより先鋭化する感じを受けた。第 2 回目は、第 1 回目で話し合った視点をふまえるが、Form C で自らの保育を広い範囲から振り返るために、話し合いでの思考の幅が広がってしまい、具体的であるべき改善点が抽象的になりやすかったというものである。この点については、話し合いの進行を調整する司会者の役割が大きいことをうかがわせた。

#### D. 結論

西南学院早緑子供の園、はっと保育園という大変熱心な園の協力をいただいたことによって、研究チームで議論したことが現実の園内研修によって検証され、問題点、課題が明らかになるとともに、その修正の場をいただけたことは大変幸いであった。

「夢中度」判定用の DVD 作製にあたっては、素材シーン 45 場面を研究メンバーで判定し、内容としてふさわしい場面であるとともに、評価が一致したものを中心に 25 場面を抽出した。そして、DVD を作製した後、再度各メンバーによって、判定理由等のチェックを行った。本報告書に添付してある。

以上のように、本年度の研究において

は、実際使える日本版 SICS のマニュアルの作成と「幼児用」に主に中心となる「夢中度」の評価 DVD、実施方法を映像化した DVD の作製を行った。多くの方の協力によってできたものではあるが、はっと保育園での園内研修では従来見過ごされていた保育改善の視点が提起され、有意義な研修会となっていた。実際にさらに広くこの日本版 SICS が活用され、園内研修で使われ、保育の質の向上に資することを期待している。

#### 謝 辞

今回の研究にあたり、多くの方々の協力をいただきました。姫路市内保育所（園）の所長（園長）の方々、アンケートに答えて頂きました関東、関西、九州地区の主任、所長（園長）の方々、西南学院早緑子供の園の先生方や子どもたち、社会福祉法人種の会はっと保育園の先生方、末尾になりましたが、感謝申し上げます。ありがとうございました。



<資料1>

## **【日本版SICS】**

# **子どもたちのエピソードから始める自己評価法**

## **実施の手引き**

**2008**

この評価法は、Sics (Wellbeing and Involvement in Care: A process-oriented Self-evaluation Instrument for Care Settings, Kind & Gezin and Research Centre for Experiential Education Leuven University, 2005) を日本の状況に合わせて改編したものです。

#### Original Authors:

Ferre Laevers (Ed.)

in collaboration with: Mieke Daems, Griet De Bruyckere, Bart Declercq, Julia Moons, Kristien Silkens, Gerlinde Snoeck, Monique Van Kessel

本マニュアルの作成にあたっては、「平成20年度厚生労働科学研究費補助金(政策科学総合研究事業)課題番号(H19-政策-一般-016)保育環境の質尺度の開発と保育研修利用に関する調査研究:研究代表:秋田喜代美」による援助を受けました。

## 1. はじめに

日々の保育をふり返り、評価し、新たな計画と実践に活かしていく方法には、さまざまな方法があります。毎日の保育を記録し、記録しながら反省をし、翌日の保育計画を立てていくという個人的な方法、特定のクラスの保育を園の保育者全員で参観し、園内研修で議論し、各々の保育の質の向上を図ろうとするもの、そして、第三者に評価を受けるものなどです。

ここで紹介する「エピソードから始める自己評価法」は、保育の記録をもとに、園の同僚との保育の質を高めるための話し合いをとおして、具体的な改善目標を設定し、明日からのよりよい保育をめざそうとするものです。三つの段階からなっており、

- ① エピソードを記録し、子どもたちの「安心度」と「夢中度」を評価する段階
- ② なぜ、その評価になったのかを分析する段階
- ③ 改善の視点を明らかにし、改善策を決定する段階

で、構成されています。

特徴は、子どもの具体的な姿から出発することです。「エピソード」と名付けていますが、特別な出来事ではなく、日常の、ある時点での活動を記録することから始めます。そして、その姿を「安心度」と「夢中度」の二つの観点から評価します。「安心度」とは、子どもがどれだけ、「心地よく」すごしているかを見る視点です。「夢中度」とは、子どもがどれだけ「活動に没頭」しているかの視点です。

そして、なぜ安心度や夢中度が高いのか、低いのかを同僚と話し合います。悪い点を探し出して直そうとする姿勢ではなく、「良いところ」をより多く見つけ出して、良いところを増やしていく中で、保育の質を向上させようとする姿勢で取り組むことが必要です。したがって、担任、主任、園長など、園の組織としての立場が異なっても、よりよい保育を協働してめざそうとする「同僚性」を基本に話し合いが進むことが望めます。

この話し合いをふまえて、今の保育のすばらしいところを明確にするとともに、さらにすばらしくするためにどのようなことができるかを目標として設定します。できるだけ具体的な目標を設定し、期限を決めて取り組みを行い、期限が来たら同僚と達成度を評価し合います。達成度に応じて、新たな目標が出てくるかもしれません。

繰り返しますが、この自己評価法は、今の保育を評価し、点数化しようとするものではありません。今の保育の良いところと、さらによりよくするための視点を得ることが重要なのです。

園全体で保育を良くしていこうとする姿勢が成功の鍵となるでしょう。

## 2. 第1段階

### (1) エピソードの記録

まず、対象とするクラスを決定しましょう。そして、エピソードの記録を取る人を決めます。担任はもちろんですが、その他の同僚の方が1名でも入ると良いと思われます。

記録を取る時間は、登園後の時間、その日の中心となる保育活動のとき、午睡後の活動内容を細かく決めていない時間帯など、1日の内でどの時間帯でもかまいません。担任以外の方に入ってもらふ必要がありますから、担当の調整を行って、担任以外の保育者が入りやすいようにしましょう。

次に対象となる子どもですが、特定の子どもを指定するのではなく、名簿順で3のつく子とか、〇月生まれの子のように、偶然に決まるようにしましょう。人数としては5-6名程度でかまいません。後に述べるように、実際に使用するエピソードは3つですが、多様な活動場面から多様な子どもの様子を選択できるように、少し多めにエピソードを集めるのです。

担任以外の保育者に入ってもらふ関係で、1日の内で長時間は無理でしょうから、たとえば、今日は登園中で先に来た子どもたちが遊んでいる時間、明日はメインの活動時間など、2-3日にわたって記録を取ればいいでしょう。

Form Aを見て下さい。1枚の用紙に2名の記録が書けるようになっています。同じ時間帯に2名の記録は取りたいものです。そうすると、担任が一人で担任外の保育者が一人なら1度の時間帯で $2 \times 2 = 4$ 名の記録が取れます。担任が2名で、担任外が1名なら $3 \times 2 = 6$ 名ですので、それほどの負担ではないと思われます。それぞれの時間帯に記録を取る子を決めておいて、一度取った子は次回は取らないように対象児の割り振りをしておく必要があります。

「エピソード」と呼んでいますが、決して特別な行動を記録する必要はありません。特定の時間帯の対象児の行動を記録すると考えれば良いでしょう。また、たとえばその時間帯のすべての活動を記録する必要もありません。その時間帯のその子の活動の様子の特徴が表現できる部分だけで良いでしょう。

### (2) 「安心度」と「夢中度」

この自己評価法の特徴の一つはエピソードから、子どもの状態を「安心度」と「夢中度」の二つの観点から評価することです。「安心度」は家庭外の場所で、家族外の人たちと生活している状態を、子ども自身がどのように感じているのかを観察によって理解しようとするものです。入園してからの日数、母子分離の状況、信頼できる保育士の存在、友だち関係、またその日の朝の家庭での状況等で変化し、さまざまな要因で、1日の中でも変化が起きます。

「夢中度」は、子どもがどのくらい活動に没頭しているのかをみようとするものです。活動に没頭しているとき、活動に心を奪われ、全能力が活動へ向けられ、最大限の力を発揮しようとし、集中度は最高に達し、時計的時間も超越してしまいます。夢中度が高いと言うことは、満足度も高く、達成感も大きなものがあります。

## 安心度

- ▶ 安心度の高い子どもたちは、心地よい状態にあり、日々の生活を精一杯楽しんでいます。
- ▶ 彼らは一緒に周りのものにかかわりながら楽しんでいます。
- ▶ 彼らは生き生きと、またリラックスした落ち着いた状態です。
- ▶ 彼らは心が開かれた感性の高い状態で、周りの環境を受け入れてかかわっています。
- ▶ 彼らはのびのびと自主性を持って、らしさを失わずにいます。
- ▶ 安心度は、自分自身に対する自信、自分を大切にする気持ち、そしてくじけない強い心とつながっています。
- ▶ これらは全て自分自身、自分の感情や経験に素直に純粹に向き合うことから成り立っています。

### ■ 安心度はなぜ重要なのでしょうか

安心度は、人がいい精神状態にいるか、また、人として心地よさを感じながら存在しているかどうかを示す指標なのです。子どもたちの安心度が低いということは、人として必要な基本的な欲求が満たされていないということです。

### 基本的欲求

1. 生理的欲求(食べる・飲む・動く・眠る・など)
2. 愛情・思いやり・優しさに対する欲求(抱きしめられる、スキンシップや傍らに居ること、愛情や思いやりを受けたり、与えたり)
3. 安全で、明らかで、継続性に対する欲求(ある程度予測できる環境にあること、どこにいるのか環境がわかること、その環境下で何が許され、何が許されないのかが明らかなこと、そして、他者を安心して頼って構わないこと)
4. 認められて肯定されることに対する欲求(他者から受け入れられ、認められる気持ち、他者にとって意味ある存在であること、集団の一員であるという所属意識があること)
5. 自主・自律に対する欲求(自分自身で何かできるという気持ち、何かを習得した自信、自己の限界へ挑戦する経験、成功経験・達成感)
6. 自己の存在意義と道徳的価値観への欲求(“良い子”であるという気持ちと他者や周りの環境とつながっているという感覚)

もちろん、不快に感じる状態が全て問題視されるわけではありません。欲求が満たされないことはよくあることです。しかし、安心度の低い状態が長期間にわたって続くことは、しばしば子どもたちの心の育ちに問題を引き起こします。例えば、自分自身や自分自身の感情を見失ってしまったり、極端に無関心、不安、攻撃的な態度を示したり、発達の遅れをきたしてしまうなどです。

つまり、安心度とは“生活の質”のことなのです。それはまた、子どもと子どもを取り巻く環境との最適な関係のことなのです。

子どもたちの安心度を向上させるということは、子どもたちを甘やかしたり、子どもたちの欲しいものを全て分け与えたりすることではありません。子どもたちは、彼ら自身の生活が真に満足する状態になるように積極的に役割を果たします。また、大人は、子どもたちの自信を育て、感じたことを表現できるように援助し、子どもたち同士でかかわり合わせ、成功する経験を味わわせ、子どもたちの才能や行動する力を伸ばすことを援助することができるのです。

### ① 夢中度

#### 夢中度

- ▶ 夢中度の高い子どもたちは、集中力も高く、また、活動に没入しています。彼らは、活動に興味を示し、やる気を喚起され、魅了されています。したがって、最後までやり遂げようとします。
- ▶ 子どもたちが何かを真似たり、何かのふりをしたりすることは、強く心が働いている活動です。彼らは、五感を最大限に働かせ、ある世界をたっぷりと経験しているのです。
- ▶ 探求心に満ちあふれることで、子どもたちはしっかりと満足感を得ることができます。
- ▶ 活動に夢中になっている子どもたちは、自分たちの最大限の能力を発揮して活動を行っています。
- ▶ このような質を携えているということから、夢中になるということは深い学びをもたらす状態であると言えます。

#### ■ 夢中度はなぜ重要なのでしょうか

夢中になるということは特別なことです。子どもたちが何かに夢中になっている姿には驚かされるだけでなく、直感的に遊びの邪魔をしないでおこうとを感じるはずで

子どもたちが何かに夢中になっている時、活動に自分の能力を傾け、彼らは“成長”しているのです。より深いレベルでの学びが生じ、彼らの能力もより高まって行くのです。

夢中度が低ければ、その理由があるはずで

す。発達が停滞している可能性もあります。したがって、子どもたちが多様な活動に取り組める環境を構成するために、私たちはできる限りのことをすべきなのです。

夢中になっている子どもは、ブロックで遊んでいたり、粘土で何かを作っていたり、パズルを作っていたり、お話しを聞いていたり、他の子どもたちとかかかわっていたり等々の活動に“没頭している”状態です。

夢中であるということは、活動している内容に心を奪われているということであり、心から興味を持ってそれに取り組んでいるということです。人に頼まれたり、強いられることから、高い夢中度を得られることはありません。活動への動機は心の内面から出て来なければなりません。

夢中であるということは、心が完全に開放された状態で活動していると言えます。そこで得られる印象は強いもので、身体的感覚や動き、色、音、匂い、味などは、他の状態では

感じることのできない幅と深さを持っています。想像力や精神活動が一気に活動し始めます。夢中度が低い場合、その感覚は生き生きとしたものではなく、表面的な感覚だけに留まってしまいます。

夢中になるということは素晴らしい状態です。まさに自分自身が別世界へ飛び込む感覚です。体中にエネルギーが走り回る感覚を味わいます。子どもたちは、自らその状態へ入り込んでいきます。遊びは、まさにこの満足感を味わうことのできる最高のものなのです。夢中度に欠けていれば、退屈で虚無感やフラストレーションを感じてしまうでしょう。

夢中度の源は、発見や探究したいという衝動にあり、自分自身の周りの世界を経験し、感覚を駆使し、現実を“つかみとりたい”という衝動にあります。もともと、この“しっかりとつかむ”という言葉は文字通り解釈されるべきで、自分自身の手の届く範囲内のもの全てに触れ、しっかりとつかみとるという意味でした。それが、徐々に、“つかみとる”ことが“理解する”ことを意味するようになり、その具体性が失われたのです。

何かに夢中になると言う状態は、その活動が挑戦を誘うもので、簡単すぎず、難しすぎないものである時において可能になります。夢中度の高い子どもたちは、自分自身の最大限の能力を発揮して活動を行っています。大人も子どもも、発達の違い、早い子にかかわらず、持てる力を出して、精一杯で取り組んでいるとき、夢中度高いと言うのです。

### (3) 「安心度」と「夢中度」を評価する

エピソードを書いたら、そのエピソードの際の子どもの「安心度」と「夢中度」を評価します。Form Aの評価を記入する欄に1から5までの評定を記入します。評定に当たっては、各評定の具体的な様子を示した下記の表が参考になるでしょう。評定に「+」のサインを使って「3+」などのように表すことも可能です。この場合は3と4の間を意味します。

書き取ったエピソードが展開されている間に、夢中度が変化することがあるかもしれません。子どもは、パズルに夢中になっていたかと思うと、突然止めてしまって友だちの遊びをじっと眺めているだけになって、その後別の遊びを始めるというような行動を取る場合があります。パズルに夢中になっていたときの夢中度は「5」かもしれません。その後、友だちの遊びを眺めているときは「1」かもしれません。新しく始めた遊びの時は「3」かもしれません。このような場合、平均して「3」にするのではなく、取り上げたエピソードの時間中の子どもの心の動きから夢中度を読み取ることが重要です。パズルをやっていたときは夢中にやっていて、確かに「5」かもしれません。しかし、それがわずか2分程度の出来事で、それが終わってしまうと、継続的に別のパズルに取り組むことなく、友だちの遊びを眺めています。このときは何もしていませんから「1」かもしれませんが、本当に何の目的もなく漠然と眺めているのか、それとも新しい遊びを探していたのかかもしれません。そして、新しく始めた遊びは、遊び道具がそろっていないで、遊びに集中できなかったのかかもしれません。つまり、その子のエピソードの間中に流れていたその子の心の動きを推測しながら夢中度を判定することが重要です。

## 「安心度」の評定

評定		様子
1	特に低い	<p>子どもが明らかに不快感を示している:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ぐずる、泣く、叫ぶ、キーキー声を出す;</li> <li>・元気がなく、悲しそうにしていたり、おびえている。パニック状態になっている;</li> <li>・怒ったり、暴れたりしている;</li> <li>・足をバタバタさせたり、床に寝転がったり、物を投げたり、他人をたたいたりしている;</li> <li>・指吸いをしたり、目をこすったりしている;</li> <li>・環境へ働きかけなかったり、人との接触を避けたり、引きこもったりしている;</li> <li>・頭を自分でたたいたり、床に倒れたりなどの自傷行為が見られる。</li> </ul>
2	低い	<p>子どもの態度、表情、行動から、子どもの気持ちが安定していないことを示している。しかし、評定1ほど明確な様子は見られず、不快感が絶えず示されている分けでもない。</p>
3	中程度	<p>子どもの態度は自然で、表情や態度に大きな変化がない。悲しそうなそぶりや喜びの表現、快適か快適でないかの様子もそれほど明確ではない。</p>
4	高い	<p>子どもは明らかに評定5に書かれている満足の様子を示している。しかし、持続的に絶えずその様子が見られる分けではない。</p>
5	特に高い	<p>観察中、子どもは楽しんでおり、実際満足している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもは楽しそうで、機嫌がよく、笑い、笑顔で、歓喜の声を出している;</li> <li>・子どもは自主的で、表現豊で、元気だ。</li> <li>・子どもは自分自身に話しかけたり、何かをしゃべったり、鼻歌を歌いながら活動している;</li> <li>・子どもはリラックスしていて、ストレスや緊張した様子を見せない;</li> <li>・子どもは開放的で、環境に積極的に関わっている;</li> <li>・子どもは生き生きしていて、はつらつとして、喜びにあふれている。</li> <li>・子どもは自信と確信にあふれた態度を見せている。</li> </ul>



## 「夢中度」の評定

評定		例
1	特に低い	<p>子どもはほとんど何の活動もしていない:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・何かに集中しているように見えない:ボーとしていて、寝起きのような状態;</li> <li>・放心したような状態で、活気がない;</li> <li>・無目的な活動、行動が見られ、生産的な動きをしていない;</li> <li>・探求心や関心が見られない;</li> <li>・何かをしようとしもしないし、心も動いてないように見える。</li> </ul>
2	低い	<p>子どもはある程度活動しているが、たびたび中断してしまう:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・少しは集中しているが、活動中に他の方を見たり、ぶらぶらしたり、ボーとしたりしている;</li> <li>・簡単に気が散ってしまう;</li> <li>・行動が単純な結果しか生まない。</li> </ul>
3	中程度	<p>子どもはいつも忙しそうにしているが、何かに集中しているようには見えない:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・決まり切った行動が多く、活動に表面的な注意しかはらっていない;</li> <li>・活動に没頭しておらず、活動が短時間で終わってしまう;</li> <li>・活動へのモチベーションがそれほど高くなく、熱中することもなく、挑戦的でもない;</li> <li>・子どもは、その活動で得られる十分な経験を得られていない;</li> <li>・子どもは自分の能力を十分に発揮していない;</li> <li>・活動が子どもたちの想像力を刺激していない。</li> </ul>
4	高い	<p>明らかに子どもは活動に参加している様子が見える。しかし、常に精一杯取り組んでいるとは見えない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもは絶えず活動に取り組んでいる;</li> <li>・活動中、真剣に取り組んでいるが、時たま、注意がそれることがある;</li> <li>・子どもは挑戦的に活動に取り組んでいて、活動へのモチベーションもある程度高い;</li> <li>・子どもの能力や想像力がある程度活動に反映している。</li> </ul>
5	特に高い	<p>観察中、子どもは絶えず活動に取り組んでおり、完全に没頭している:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもは、活動中、中断することなく、完全に焦点を定めて、集中している;</li> <li>・子どもは活動に対して高いモチベーションを持っており、活動に魅力を感じていて、辛抱強く取り組んでいる;</li> <li>・何か強いじゃまが入っても、気を散らすことがない;</li> <li>・子どもは注意深く、細部にも注意を払い、几帳面に活動している;</li> <li>・精神的な活動も、実際の経験も高いレベルである;</li> <li>・子どもは絶えず全力を尽くしている。想像力も精神的な能力も最大限に働かせている;</li> <li>・子どもは活動に夢中になることを楽しんでいる。</li> </ul>

(4) Form A 記入例

第1段階

Form A

活動中の子どもの姿

子どもの名前: <u>こくぼりさ</u>	安心度	夢中度	子どもの名前: <u>たかはしゆうき</u>	安心度	夢中度
7月14日 記録者: <u>関口美佳</u>	5	5	7月14日 記録者: <u>関口美佳</u>	3	2
エピソードとその背景 午睡後、おやつも食べた後の時間帯。 さやかちゃんとゆきちゃんを誘って、積み木と板を使ってタワーづくりをする。リサちゃんとさやかちゃんは積み木を板の四隅に置き、その上にまた板を置いてタワーを高くしていく。ゆきちゃんは、その板の所にミニカーやカラプロックを置いて、かざりのつもりだが、リサちゃんが置くのをやめさせた。高く積むためにじゃまだと思ったようだ。さやかちゃんも積極的なので、リサちゃんとさやかちゃんは言葉を変えさなくてもどんどん積んでいく。ゆきちゃんは、高く積むことには参加せず、脇に積み木を積んでタワーの幅を広げようとしている。 11段積んだところで、大きな板がなくなったので、大きい板の1/4の板を使って、さらに6段積んで、タワーが完成した。			エピソードとその背景 なつみちゃんとまいちゃんと一緒にごっこ遊びをしている。四つ這いになって犬の役をしている様子。なつみちゃんとまいちゃんが何も言わないので、四つ這いから腹這いになって、動かなくなってしまった。しばらくして、なつみちゃんが皿にカラフルな『えさ』を入れて持って来て、頭をなでながら食べるように促すと、食べるまねをするが、すぐ止めてしまう。なつみちゃんは『よしよし』をしたらまいちゃんと自分の衣装を替え始めた。 しばらくして、ゆうきくんが他の場所へ犬がびよんびよんするようにして動いたら、まいちゃんが連れ戻して穴の空いた大型積み木の中の『犬小屋』へ入れられてしまった。		

担任が書くエピソードは、他の子の保育を行いながらの観察がベースになりますから、時には見えないときもあって、なぜそのような行動に変わったのかが捉えきれない場合もあります。しかし、無理な推測をせず、見たままを記録するようにしましょう。

「安心度」と「夢中度」の評定は、観察した姿から行うのが良いでしょう。エピソードとして書いたことだけをもとにすると、活動中の子どもの実態を正確に反映しなくなる可能性もあります。特に、エピソードとして取り上げた場面の中でも、時間の経過とともに「夢中度」が変化し、一体いつの時点での評定を行えばいいのか判断に迷うかもしれません。そのようなときには、観察中のその子の夢中度がどのように変わったのかを思い出しつつ、その活動中のその子の心の動きを観察者がどのように感じたのか、どのような印象だったのかで判断しましょう。瞬間的に何かの弾みで夢中度が高まっても、高まった要因が消えたとともに、夢中度も下がってしまうことがあります。その活動時間中、結局その子は満足できる活動が行えたのか、瞬間的には高かったが、それ以外の時間はあいまいな行動に終始し、結局不満なままだったのかを評定しましょう。後の話し合いでは、評定自体を数字として扱うのではなく、その評定になった要因について話し合いますから、無理に高い評定をつけようとする必要はありません。この評価表は、子どもの「安心度」「夢中度」の評定が低いことで、保育者の保育の質の「低さ」を責めようとするものではありません。素直に感じたままを評定し、園の同僚の協力を得て、よりよい保育をめざそうとするものなのです。

### 3. 第2段階

#### (1) 観察の分析

Form Aで行ったエピソード記録と「安心度」「夢中度」の評定をもとに、保育の現状を分析するのが、第2段階です。担任と担任外の保育者で観察に入られた方、そしてその他日常の園の保育を見知っている保育者が話し合いに参加されると、多面的な視点からの議論になるでしょう。

議論に入る前に、集められたエピソード5-6のうち、3つのエピソードを選びます。すべてを取り上げたいのですが、限られた会議の時間を考えると、じっくりと話し合うためには3つが適当と考えられます。選択に当たっては、まず担任のものは必ず1つは取り上げましょう。次に、夢中度などの評定が多様になるようにしましょう。夢中度などの評定が似通ったものばかりの場合は、取り上げているエピソードの活動場面が多様になるようにしましょう。

議論をするに当たって、Form Bを使用します。Form Bは、三つの要素から成り立っています。一つは「保育活動そのもの」、二つめは「子どもとその背景」、そして三つめは「特別な事情」です。中心となるのは、「保育活動そのもの」の部分です。エピソードについて以下に述べる5つの視点から「なぜ安心度と夢中度が高かったのか/低かったのか」を話し合い、1枚のForm Bを完成させます。

話し合いの参加者全員に用紙は配っておき、視点を確認できるようにしておき、話し合いの結果を誰かがまとめて1枚の用紙に清書するようにすれば良いでしょう。

3つのエピソードを取り上げますが、別々の用紙を使用するのではなく、3つのエピソードについての話し合いの結果を1枚に書き込みます。したがって、同じ視点のところで安心度、夢中度が高いことについての話し合いの結果と、低いことについての結果が記録されるかもしれませんが、相反する結果がでること自体も保育をふり返る上で重要なことなのです。

「保育活動そのもの」は5つの視点から構成されています。「豊かな環境」「集団の雰囲気」「自発性の発揮」「保育活動の運営」「大人の関わり方」です。

#### ① 豊かな環境

子どもたちが活動している環境はどれくらい豊かですか？

より細かく見ていきましょう

- ・ 基本環境:保育室やその他のスペースの多様な設定と構成
- ・ 子どもが使うことができる、遊び道具や保育教材
- ・ 活動内容

子どもたちは魅力的で、多様な環境において、楽しみ、最もよく発達します。子どもたちが活動に夢中になって取り組むことができる機会を多く提供することが重要なことです。これは、絶えず新たな保育教材や活動を提供し続けることによって可能になるのです。

#### ② 集団の雰囲気

子どもたちは保育環境や集団の中で、どれくらいおのびおのびしていますか？

より細かく見ていきましょう

- ・ 保育室の環境の構成や、全体的な印象
- ・ 子ども同士の仲間作りへの努力

子どもが保育施設にいることが好きだったり、そこが快適だと感じたりするかどうかは、多分に雰囲気に関係しています。雰囲気というものは多様なものですが、たいてい保育環境や集団を特徴づける基本的な雰囲気があります。もしすべてがうまくいっていれば、観察者は活発な人の関わり合い、たとえば、子ども同士や、子どもと保育者のふれあいや、笑い声、自主的な活動などからそれを感じ取ることができるでしょう。

環境の構成は大いに良い雰囲気を作り出すことに関わっています。保育室はどれくらい温かい雰囲気になるように飾られているでしょうか？ どのような色が保育室の印象を作っているでしょうか？ 保育室の物の配置や構成がどのような印象を与えていますか？ 保育室が、乱雑だったり、几帳面に整理しすぎてあったりしませんか？

当然、雰囲気は、子ども同士や子どもと保育者との人間関係から生まれてくるものでもあります。したがって、友だちとの楽しい時間を作ったり、子ども同士の仲間づくりや、周りの大人との積極的な人間関係を作ったりすることをあなたが援助することによって、子どもは集団への帰属意識を強めていくことができるのです。

### ③ 自発性の発揮

子どもたちにはどれくらい自由がありますか？

より細かく見ていきましょう

- ・ 基本:保育者が子どもに何をし遊び、どれくらいの時間、どれくらいの頻度で、誰と遊ぶのかを決めさせる機会がありますか？
- ・ どの程度子どもたちはその日に何をするか、どのような順序でするかなど、することを決めることができますか？
- ・ 子どもたちは、その程度その日の活動の展開に責任を負っていますか？
- ・ 様々なルールが、どの程度子どもたちに説明されたり、子どもたちと相談して決められたりしていますか？

子どもたちがやりたいと思うことをすることが、大きな満足を生み出しますし、高い夢中度の条件です。子どもたちは自分の興味や能力に応じた活動に取り組もうとします。それを可能にするには、子どもたちが自発性と活動への強い意欲を発揮できるようになっている必要があります。保育者は、子どもたちが、そのようにできるようにどの程度していますか？ また、子どもたちは自分が魅力的だと感じるおもちゃを選ぶことができますか？ もちろん、これらのことはある一定の範囲内でのことであり、はっきりしたルールと子どもたちの了解がなければなりません。

また、「自発性発揮の余地」とは、保育者が積極的に子どもたちを、その日の活動に参加させるようにし、子どもたちができる範囲で自分の活動に責任を負うようにすることも意味しています。

### ④ 保育活動の運営